

「教師—生徒関係」におけるコミュニケーションの課題

—中学校教師を対象とした面接調査を通して—

高橋 早苗*・鈎 治雄

1 問題と目的

学校や児童生徒を取り巻く今日の教育状況は、いじめ、不登校、学級崩壊、退学、ひきこもりなどにみられるように多くの問題を呈している。これは、児童生徒の側だけでなく、教師にとっても深刻な問題となっている。文部科学省（以下文科省）のまとめによると、うつ病などの精神性疾患で昨年度に休職した公立学校の教員は過去最多の4178人となり、13年連続の増加傾向をたどっている。これに対して文科省では「保護者や子供、同僚との人間関係に悩む教員が増えている。」と、見解を述べている。¹

また、経験豊かな教師の学級でも学級崩壊が起こっている現状である。その現状に対し、2人に1人の教師が担任をやめたいと感じているという調査結果も出ている。²

中学校教師に対する意識調査では、担任として3割以上の教師が悩みを抱えている。その内容は、「問題行動を起こす生徒がいる」（53.0%）、「クラス経営がうまくいかない」（45.2%）、その他に勉強の遅れた生徒や不登校の生徒、授業をかき乱す生徒がいるなどである。³ この他、学校現場で最近の生徒をどう思うかについて教師の声を聞くと「人間関係が希薄になっている」、「表面的なつきあい」、「集団で遊べない」、「自分の気持ちを表現できない」、「友達関係が固定している」、「イヤだと言えない」、「人の気持ちを考えて行動できない」などがあげられる。

それらは、生徒のコミュニケーション不全状態を特徴としてあげているが、「教師—生徒関係」に関しては、「子どもが分からない」「子どもに言葉が通じない」などの悩みを打ち明ける教師も多い。

そのような中で、学校の教師は、教科指導よりも生活指導、生徒指導、行事、保護者とのかわりなど教科外の仕事に多くの時間を割かなければならず、疲労感とバーンアウト症候群などが蔓延してきている。

教師の抱える問題に対する意識調査は多く見られる。山口は教師の「心の病」と職場環境という広い観点から分析しており、⁴ 秦はストレスという観点から要因分析を行っている。⁵ 「教師—生徒関係」に関する意識調査としては、山口は教師と生徒の心理的距離の[現状]と[理想]に視点を置き、そのズレや心理的距離の変容にかかわる要因を研究している。⁶ また越智は、「教師—生徒関係」に着目して教師の心の病に関する研究を行い、「教師—生徒関係」が、教師のアイデンティティや教育実践を支えるとともに、バーンアウトなどの「心の病」とも関連していることを指摘している。⁷

それらの研究から、「教師—生徒関係」における現状や問題点をあげることはできるが、そのなかで教師自身がどのような思いで生徒と接し、苦悩し工夫してかかわっているのかという

* 大和市立光丘中学校（創価大学通信教育部非常勤講師）

実態はつかみにくい。そこで、「生徒—教師関係」におけるコミュニケーションの実態を教師へのインタビューにより、現場に即した質的研究の視点から問題点を捉え、よりよいコミュニケーションのための視点を探っていきたいと考えた。

2 研究方法

(1) 研究方法

学校現場における教師の内面的な認知に基づくデータを収集するために質的研究方法を用い、半構造化面接を実施した。分析方法として、インタビューした内容をトランスクリプションしてデータ化し2段階に分けて行った。はじめは、教師が生徒とのコミュニケーションにおいてどのような問題を感じているかを明らかにするために、データ化した発話から、教師が抱えている問題や困っていることについてキーワードを抽出して、KJ法を用いて分類を行った。次に、教師の思いをデータに即して読み取るために、データ密着型を手法とするグランデッド・セオリー・アプローチを参考に分析を行った。ここでは、データを切片化せずに分析を行う修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた。¹⁰⁾これは、インタビューの内容を細かく切片化することで、言葉に内在する教師の思いが分散されるために、一つの意味のあるまとまりのある単位（文節や文章）ごとに区切って分析する修正版グランデッド・セオリー・アプローチが適切であると判断し用いた。

(2) 調査と分析の方法

調査協力者

対象は、男女比、年代、経験年数を考慮し中学校の教員10名とした。(Table 1) 地域は、調査者の依頼に応じてくれた神奈川県、東京都、千葉県、埼玉県の首都圏である。これは、調査協力が可能な範囲で行った。

調査の手続き

調査時期は、2004年6月～8月で、調査方法は半構造化面接を用いた。一人当たりの面接時間は、60分から90分とした。ただし、1名2時間半に及ぶ対象者もいた。面接実施場所は、各調査協力者との合意によって決定し学校や自宅で行った。面接過程は、協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音した。協力者は、筆者の知人、または知人に紹介してもらうなどして依頼した。

半構造化面接は、質問項目(9項目)を記したインタビュー・ガイド(Table 2)を参照しながら質問を行い、回答を得た。面接の際、初めに、話しやすい雰囲気を作るため、ラポール形成を考慮した話から始めた。また、質問項目については、協力者の雰囲気や語りに合わせ、順序や質問の仕方などについては柔軟に対応し、協力者が語りやすい雰囲気に留意した。

面接調査の実施に当たっては、次の手続きに従って行った。

- ① 協力者の了解を得る。

Table 1 調査協力者一覧

NO	年齢	性別	経験	担任
1	25	男	1	担任
2	39	男	18	担任
3	41	男	18	担任外
4	48	男	20	担任外
5	51	男	30	担任外
6	27	女	3	担任
7	36	女	13	担任外
8	40	女	18	担任外
9	44	女	23	担任
10	58	女	36	担任外

- ② 研究の目的，面接の目的について説明する。
- ③ 協力の承認を得る。
- ④ 記録の了解を得る。
- ⑤ 情報の使用について，研究以外に使用しないことを約束する。
- ⑥ 氏名等の個人情報，他に漏らさないことを約束する。

また，面接時には，次の点に配慮した。

- ① 話しやすい雰囲気をつ心がけ，気楽な気持ちで応えられるようにする。
- ② 協力者が答えたくない内容については，しつこく質問しない。
- ③ 聞く順序は協力者の語りに沿って行う。
- ④ 聞くペースを守る。
- ⑤ 同じ質問を繰り返すときは，相手を攻めるような口調にならない。
- ⑥ 協力者が予想外の反応をしても，過度な反応をしたり，誘導的な質問をしたりしない。

以上の点を配慮し，各協力者には，面接過程の録音，得られたデータは研究のためだけに使用し，個人が特定されないようにデータを加工することを説明した了解を得た。調査項目に関しては，生徒とのコミュニケーションに関することから，調査に対する妥当性，倫理面に関する問題がないと判断して行った。

Table 2 質問項目

1. コミュニケーションに関する悩みはどのようなものか。
2. 生徒とのコミュニケーションに関して
① 生徒と話す場面は，どういうときが多いか。
② 話しやすい生徒，話しにくい生徒のタイプはあるか。
③ 生徒に腹の立つことはあるか。
④ 会話の量はどの程度か。
3. 生徒同士のコミュニケーションに関してどのように感じているか。
4. その他，同僚や保護者とのコミュニケーションに関して悩んでいることはあるか。
5. 生徒とのコミュニケーションに関して工夫していることはどんなことか。

(3) 分析の手続き

面接調査の分析に当たっては，発話をトランスクリプションしてデータ化し分析を行った。はじめに課題の抽出においては，KJ法を用い分類を行った。

次に，分析の手順が明確な修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

まず，分析テーマに照らしてディテールが抱負で多様な具体例がありそうな一人分のデータを最初に取り上げ，関連のありそうな箇所に着目しながらデータを見ていく。着目したデータの意味について考え，データの解釈を行いながら，それに適した言葉を探していく。そのデータとの対話のなかから，【概念構成】を行っていくのであるが，それに際しては，木下のオリジナルの分析ワークシート（構成は，概念名，定義，ヴァリエーション，理論的メモ）を参考に使用した。

〈概念名〉—データのある箇所に着目し、その意味の理解から類似例の比較を他のデータに対して行い、概念を形成していく。さらに対極比較する。

〈定義〉—解釈した意味を短文で記入していく。

〈ヴァリエーション〉—概念構成の元になったデータ。

〈理論的メモ〉—解釈の思考プロセスを記入していく。

概念構成が出尽くした次点で、次にカテゴリーの生成を行っていく。ここでは、一つひとつの概念について他の概念との関係の一つずつ検討していく。その際、概念の関係が見えてきたらその都度、図式化し空間配置をしながら関係を見て、理論的メモに記入していった。

この段階では、いくつかのカテゴリーがばらばらのままであるが、次にカテゴリー間を見ていくなかで、この分析が明らかにしつつあるのはどのようなプロセスなのかという視点を持って、推測的、包括的にカテゴリーを見ていく。ここでは、無理に一つのコアカテゴリーに収束することはせずに、カテゴリー間の関係が見えたところで分析をまとめた。

3 研究結果

(1) 中学校教師が抱えるコミュニケーションの課題

10名の面接調査の結果についてKJ法を用いて分析を行った。まず、1次読み取りとして、教師が抱えるコミュニケーションの課題に関するデータを抽出したところ252項目があげられた。さらに、その項目のカテゴリー化についてKJ法を用いて行ったところ8のカテゴリーに分類された。

そのカテゴリーは、表に示す通り、「疲労・喪失感」・「生徒理解の困難さ」・「生徒との関係作りの難しさ」・「指導の困難さ」・「生徒との会話の問題」・「子供同士の問題」・「対教師関係の悩み」・「保護者との関係の悩み」である。(Table 3)

「疲労・喪失感」では、部活で土日がないことがすごいストレスになっているなど仕事の忙しさをあげている教師が多い。また、授業中、不用意な発言や勝手なことを言う生徒に対する指導上の悩みや自分の指導がうまく行かないことへの自信のなさがある。「生徒理解の困難さ」では、かまってもほしくて、教師をからかったり教師に甘える生徒や自分を出さず無表情な子など理解しづらい生徒が増えていると感じている。理解しあえる関係をつくりたいと願っているが、難しさも感じている。「生徒との関係作りの難しさ」では、話をしても無視をする生徒や反抗的な態度など教師への態度に対しての悩みや、一生懸命やっても、子ども本位でないと関係がこじれていたり、会話が成り立たない、生徒とのギャップを強く感じるなどの関係不全を感じている。また小学校で学級崩壊を経験している子どもは、大人に不信感を持って信頼関係をつくりにくいことをあげている。また、生徒と一定の距離を保つことで関係を成立させている場合と担任外の立場で生徒との距離を感じてコミュニケーションがとりにくい場合がある。「指導の困難さ」では、人に迷惑をかける行為があったときや生徒の問題が原因で怒るときに注意しても受け入れない生徒や反抗的な生徒、話が通じないなどの困難を感じている。「生徒との会話の問題」では、時間的にも厳しいし、忙しく余裕がなく会話量が不足していることや友達を目などを気にして教師に相談に来ないなどコミュニケーションが量的に不足していると感じている。また、質的な面においても教師の側にも伝えるべきものがないと形だけのコミュニケーションになってしまうと感じている。「子供同士の問題」では、友達に対してきついことをはっきりいう攻撃的關係や言葉が足りなくてトラブルになる場合など、関係不全を

Table 3 面接調査結果

カテゴリー／グループ		数	データ
疲労・喪失感	仕事の忙しさ	8	・担任の仕事がこんなに忙しいということを把握していなかった，学校以外のところまで際限がない。(1) ・部活で土日がないのがすごいストレス。(3)
	指導上の悩み	7	・自分の指導がうまくいくときと行かないときがある。(7) ・最近の子どもがわからない。会話が成り立たない。(5)
	授業に関する疑問・自信のなさ	8	・授業中かってなことを言う。不用意な発言。(9)
	叱れない	7	・腹の立つことばかりだけれど，怒ってもしようがない。(10)
生徒理解の困難さ	生徒の考えが分からない	13	・黙っていて無表情な子が何を考えているのかを，どうやって知っていくのが大変。(1)
	苦手な子	6	・自分を出さない子は話しづらい。(5)
	理解しあえる関係をつくりたい	4	・お互いに理解できるようなコミュニケーションが理想だが・・・。(6)
	教師への甘え	4	・かまってくれない，無視をしたら余計にやる。(10)
生徒との関係作りの難しさ	教師への態度に対して	8	・話をしてしても無視をする。(6)
	子ども本位のかかわり	11	・一生懸命やっても，子ども本位じゃないと関係がこじれていく。(7)
	会話が成り立たない	6	・ぜんぜんコミュニケーションにならなくてつらかった。(5)
	関係不全	10	・男子とすごくうまくいかない。(7) ・生徒とのギャップを強く感じる。(5)
	信頼関係	5	・学級崩壊を経験している子どもは，大人に不信感を持っている。(9)
	生徒との距離	14	・生徒との距離は，ある程度とっていないとだめ。(9) ・なれなれしい子は話しはできるが，人間関係は作りにくい。(8)
	反抗的な態度	4	・注意したことに，いちいち反論してくる。(5)
	担任外の立場	5	・担任じゃないと会話の質が浅くなる。(3)
	かかわりの工夫	4	・授業中の発言を細かくチェックしていく。(1)
指導の困難さ	生徒の問題が原因で怒るとき	13	・人に迷惑をかける行為があったとき。(9)
	反抗的な子	4	・注意されても受け入れない子。(9)
	間接的にかかわり	3	・話が通じないときは，第三者を使う。(3)

() 内の数字は，Table 1の協力者のナンバー

「教師—生徒関係」におけるコミュニケーションの課題

生徒との会話の問題	会話量不足	10	・コミュニケーションは足りていない。(2)
	会話の場面	11	・授業、休み時間、昼休み、部活。(2)
	足りない理由	6	・時間的にも厳しいし、忙しく余裕がない。(6)
	周りの目	4	・友達のと目を気にして教師に相談に来ない。(9)
	教師からの言葉かけ	4	・できるだけ生徒とは話をする。(9)
	教師の思い	2	・教師の側にも伝えるべきものがないと形だけのコミュニケーションになってしまう。(8)
子供同士の問題	攻撃的關係	9	・きついことをはっきりいう子がいる。(7)
	關係不全言	11	・言葉が足りなくてトラブルになることが多い。(10)
	相互の力	4	・子供同士のかかわりの方が大きい。(7)
対教師關係の悩み	他教師の生徒への一方的な対応	5	・一方的に理由も聞かないで怒ってるのはいや。(6)
	他の教師との協調	9	・一人で問題を抱え込まないで、他の教師に相談をする。(7)
	教師關係不全	14	・先生同士が仲が悪い、職員室がとげとげしている。(6)
	他の教師から学ぶ	2	・他の教師のいいところをみて取り入れている。(7)
	教師の集團形成	4	・教員をひとつにまとめるのは大変。(9)
保護者との關係の悩み	親の変化	6	・自己中心的なお母さんが増えている。(5)
	教師への見方	3	・高学歴で、教師を見下している保護者が多い。(9)
	家庭との連絡	2	・基本的には対面しないと伝わらない。(8)
	親同士親	2	・親同士もしょっちゅうけんかしていて、まとまらない。(10)

感じる場面が多い。「対教師關係の悩み」では、他教師が生徒に対して一方的に理由も聞かないで怒ってるのはいやだと感じていても言えなかったり、先生同士が仲が悪い、職員室がとげとげしていると教師關係の問題を感じている。また、主任の立場から、教師の集團形成において教員をひとつにまとめるのは大変であるなど、教師關係不全をうかがわせる事例もある。「保護者との關係の悩み」では、自己中心的なお母さんが増えているなど親の変化や高学歴で、教師を見下している保護者が多いなど教師への厳しい見方など關係作りの困難さがうかがえる。また、親同士もしょっちゅうけんかしていて、まとまらないなどの問題もある。

これらの結果から、授業そのものよりも、授業を成立させている生徒との關係における理解やコミュニケーションにおいて悩みを多く抱えていることが伺えた。教師が苦手とする生徒は、消極的で、自分の気持ちを表現しないおとなしい生徒が最も多くあげられ、中学校教師の場合は、話しかけてくる生徒とは、よくコミュニケーションをするが、目立たない生徒は、教師との關係が希薄になっているのではないかと考えられる。また、コミュニケーションに関しては、中学生という発達段階からみて、ただ触れ合うというよりは、大人との距離を持って、内容のある話を行うことを教師の側が求めていることが感じられた。「教師—生徒關係」では、生徒が理解できない、またよりよい關係を結ぶのが難しいと感じているのは、経験の多い教師に多くみられる傾向があった。逆に、経験を積むにしたがって、生徒に対して怒る度合い

は低くなっている。怒ることに関しては、演技も含めて、必要に応じて自分をコントロールしている傾向がみられた。コミュニケーション量に関しては、どの教師も不足していると感じており、その原因に忙しさ、余裕のなさをあげている。また、生徒の語彙不足をコミュニケーション不全の要因としてあげている教師もいる。

(2) 修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた分析

ここで生成されたカテゴリーは、25であった。(Table 4) 概念間の関係の一つずつ検討した結果、Fig. 1の空間配置になり、カテゴリー間の関係を分析していった所、次のようになった。

教師は生徒の実態について、【気になる子どもの様子】をキレやすく現実逃避や無気力、理解力困難、【自己中の表現や行動】などの特徴を挙げており、個別の支援が必要な生徒が増えていると感じている。その特徴から【友達同士の関係不全】が生じていることを指摘している。

また、教師は【生徒との会話の難しさ】から会話をして何を考えているのか分からないことがあり【子どもがわからない】と感じている。その中でも【個に応じたコミュニケーション】を大切にし、【会話の工夫】をしながら意志の疎通を図ろうとしている。具体的には、ただ【叱る】だけでなく、【受容の範囲】を見極め、【生徒主体の接し方】をするようにしている。しかし、生徒の【反抗的態度】に【教師の威厳、尊敬】が損なわれることを恐れており、【子どもとの距離感】を読むことや【子どもは教師を見ている】ことの意識に通じ、生徒との緊張関係の中にある教師のストレスを感じる。そのことが、教師が一方向的に生徒に向かっていくというよりは、【生徒の反応を大切にしている】【子どもは教師を見ている】ことから、受身的な面を生んでいるのではないと思われる。また、教師自身が生徒に語りた物や信念などの【教師の中に核を持って生徒と接する】ことが大切であると感じており、教師の自信が生徒へのかか

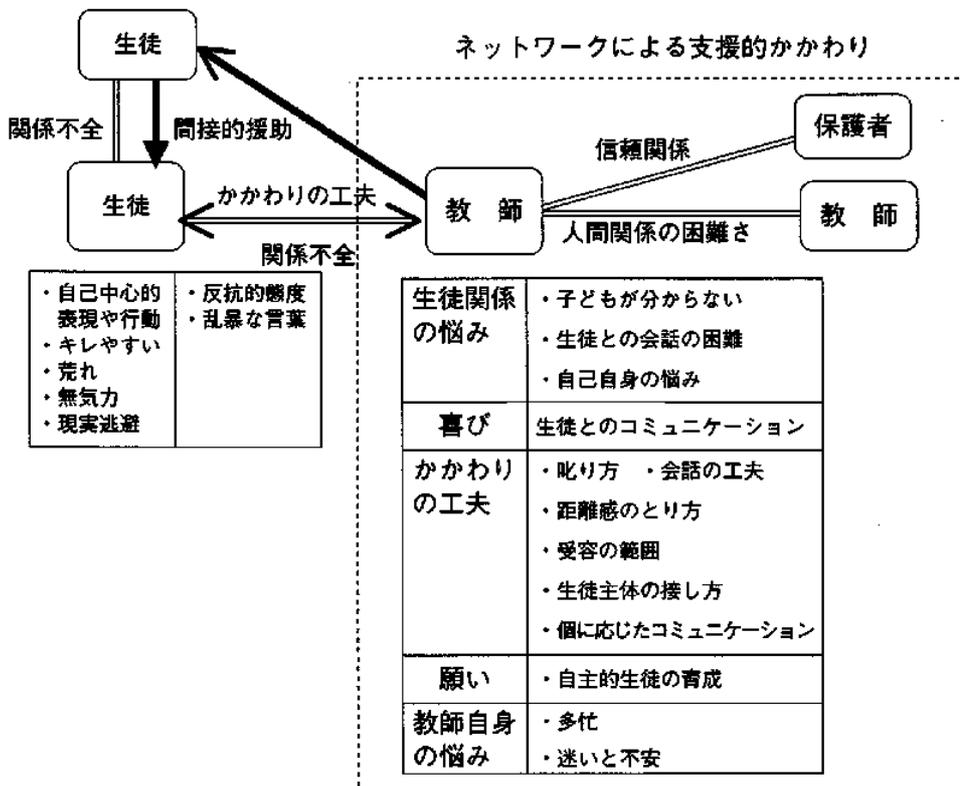


Fig. 1 教師のインタビューから生成された関係図

Table 4 生成された概念と定義及び具体例

概念名	定義／代表的な具体例
気になる子どもの様子	甘えがあり、すぐにカッとなるキレやすい子、現実逃避や無気力の子の存在が気になっている。自分のことが考えられなかったり、理解できなかったりする支援を必要とする子が増えていると感じている。
	NO.5 自分を表現はしますよね。昔に比べて表現はね。表現するけど、その表現の仕方が、だから、ほんとに自己中心的な表現の仕方だからね。だからそれが、お互いにお互いぶつかった時は、うまくいかないですよ。
自己中の表現や行動	言葉遣いが悪く、自己中心的表現が目立ち、生徒同士でも教師に対しても思ったことを深く考えずに口にする。行動面でも、荒れた行動をする生徒がいる。
	NO.5 語彙がなくて「ウゼイ」、「どっか行け」、この会話しかない。 NO.10 後ろのロッカーのところにみんな座り込んで、授業しない、漫画の本を読んだり、徘徊したりという感じ。
友達同士の関係不全	お互いに傷つけあうことが多く、心が伝わらず、友達同士の関係が作れなくなっている子が多い。
	NO.5 子供たちの中で、人間関係を作るのが下手じゃないですか、今。子供たち同士で、いじめとかがって、結局、そういう部分で会話が、語彙がないから、そんなところで乱暴な言葉とか。相手に興味を持たせるような、要するに、関心を持ってもらうために変な言葉なんか使ったりするじゃないですか。それは、人間関係が希薄になっているから。
子供同士の関係の自発的な援助	不登校や不適應で困っている子に対して、教師が前面に出るのではなく、子供同士が自発的に援助できることを望んでいる。
	NO.6 その他の友達に働きかけて、その子が上手くいくような場合もあるし、全部自分が前面に出る必要は一。逆に前面に出ないようにできたらいいなあ、と最近思いますけどね。
子どもがわからない	子どもとの会話が成り立たないことがあり、年々、子どもが変化していて、何を考えているのか分からないことがある。
	NO.5 子供が分からない。最近の子どもが分からない。会話が成り立たないというか。そういうところでは悩みがありますね。
生徒との会話の難しさ	話を聞いてくれなかったり、思っていることが伝わらなかったり、教師は生徒とのコミュニケーションが難しいと感じている。
	NO.4 話しが通じているのか通じていないのかわからないときの方が多い。…うなづいているけど分かっていないのかとか。その後も同じことを繰り返していることがありますからね。
叱る	人に対して迷惑な行為や教師を無視した態度に対しては、教師は腹が立つと感じている。しかし、怒っても仕方がないと叱り方を工夫している。
	NO.9 怒っちゃうのは人に迷惑をかける行為があったとき。やっぱり相手がいることだから。それに対しては「いい加減にきなさい」って言いますよね。
教師の願い	教師は基本的なルールを守り、自主的に行動できる生徒を求めている。
	NO.1 人に指示されて動くんじゃなく、自分で、自分たちで動けるように…。

<p>子どもは教師を見ている</p>	<p>生徒は教師によって態度を変えたりするが、信頼できる先生には心を開いていく。</p> <p>NO.1 子どもたちが先生を選んで話す。同じ質問されても、ある先生にはしっかり答えていない、ある先生には事細かく説明をしているみたいな。子どもが先生を選んでいる状態というのがよく見られますので。</p>
<p>反抗的態度</p>	<p>生徒に注意をすると、いちいち反論してきたり、逆ギレされたりすることがある。それは教師に対する甘えの裏返し的一面もある。</p> <p>NO.5 たとえば、もうちょっと真面目に授業を受けなさいよとか言うことに対して、いちいち反論して「そんなこと言ったって。何とかかんとか」とか。たとえば、「授業がうまくないじゃん」とか平気で言ったりする。</p>
<p>子どもとの距離感</p>	<p>生徒との関係において、距離を置いて接することや時間的な間をとることが重要である。</p> <p>NO.7 あんまり自分が子どもと一緒にいてもいけないかなと思って、ある程度自分は大人なんだと保っていなければいけない所は、結構無理をしているときもある。</p>
<p>受容の範囲</p>	<p>問題行動を示す生徒に対して、どこまで受け入れられるか、受け入れられないときは、排除する方向に行ってしまうが、子どもとしてみて仕方が無いと感じるかである。</p> <p>NO.6 私の枠に入らない子を、今考えると排除していたんだと思います。その怒るっていうことで。</p>
<p>生徒主体の接し方</p>	<p>管理的な接し方では、子どもがのびのびせずにある程度子ども主体でいきながら、生徒に考えさせたり気づかせたりしていくことが大切だと思っている。</p> <p>NO.6 一生懸命働きかけて、一生懸命やっているつもりなんですけれども、どんどんこじれていくようなことがあったときに、振り返ってみると、結局、子供本位じゃなくて、自分本位で指導していたのかなあっていう。</p> <p>NO.7 管理的な先生のクラスだと、あんまり子どもの発言がのびのびしていない。</p>
<p>生徒の反応を大切にしている</p>	<p>教師は授業においても、普段の生活においても生徒の反応を気にしている。したがって、反応のない生徒やクラスは苦手である。</p> <p>NO.1 自分に話してくれる子とか表情の起伏が激しい子は、意外に何考えているか分かるのでいいんですけども、黙って行って無表情な子とか、その子たちが何を考えているのかというのをどうやって知っていくかというのが大変だなあと感じます。</p>
<p>意志疎通の喜び</p>	<p>生徒と話をして、意志の疎通が図れるときは教師は喜びを感じ、心が通じ合えないことに苦勞を感じている。基本は信頼関係であると思っている。</p> <p>NO.7 本来的には子供がニコニコ笑って、安心して、ああ楽しかったっていうふうにコミュニケーションが取れるのがベストだなと思う。コミュニケーションとってよかったなあっていう、そういうふうになるのが一番いいなあと思っていますけれどもね。</p>
<p>教師の威厳、尊敬</p>	<p>生徒とは信頼関係を築きたいが、友達関係とは違い教師として尊敬された関係の中で身を置くことで、教師自身が安定感を得られる。</p> <p>NO.7 先生という立場をわきまえていて、話しかけてくる子に対しては、こちらも非常に話し合いやすい。</p>

「教師—生徒関係」におけるコミュニケーションの課題

<p>会話の工夫</p>	<p>生徒とのコミュニケーションでは、特別に構えて行うというより、作業をしながら、たわいも無い話のなかで理解を図る工夫をしているところが見られる。</p> <p>NO.4 話しにくい子の中にどう入っていくかというのが自分の課題でもあるが、何かキッカケを作って話すようにしている。時間はかかるが。</p>
<p>個に応じたコミュニケーション</p>	<p>全体で話をするとき、個別に話をするときと一定の決まりをもうけて接している。また、生徒に応じた接し方をしている。</p> <p>NO.1 個別は本当の本音を聞く聞きたい時で、ある程度の人数を呼ぶときは、お互い意識を高め合わせたいという風に使い分けたいと思っているので。</p>
<p>ネットワークの活用</p>	<p>担任や個人で生徒を抱え込むのではなく、学年や学校での連携を通して生徒理解や援助を図っていこうとしている。</p> <p>NO.6 一人でやっぱり抱え込まないように、そういうときは、他の人の目も入れてもらって、他の先生にも相談して。</p>
<p>親との信頼関係を築くことの大切さの実感</p>	<p>保護者との信頼関係が大切であるが、保護者が多様化し信頼関係を築くことが難しくなっている。しかし、話し合うことで連携を深めることができると感じている。</p> <p>NO.7 各ご家庭の考え方が非常に多様化していますので、こちらがこういうケースだったら、保護者の方がこういうふうに対処してくださるんじゃないか、こうお話しすれば納得してくれるんじゃないかとか思っていた場合に、あの予測と違うことが結構あります。</p>
<p>職場の人間関係</p>	<p>同僚の影響は大きい。いいモデルにもなるし、反面教師として映る場合もある。しかし、本音で語り合えないという問題も抱えている。</p> <p>NO.4 学校、学年によって仲のよい集団とそうでないときがある。それは考えさせられる。やはり極端ですよ。価値観が違いすぎるのに同じようにしようとしているところに無理がある。そういう先生方が集まった集団はギクシャクする。</p> <p>NO.9 男の先生たちは、俺達がいなさみたいなのところがあるのかわからないけれど、・・・だから、学校の休憩室で、悪口じゃないけど、言ったりするもの。あの、悪口っていうか、なんて言うんだらう、女の先生方の。だから、生徒指導が、あまり出来ない先生のことは、無能呼ばわりだし、・・・</p>
<p>教師の中に核を持って生徒と接する</p>	<p>生徒と接するときに、自分の核や伝えたい考えを持って接しないと形式的なコミュニケーションになってしまう。</p> <p>NO.7 教師の側にも、なんかこう、話すべきというか、伝えるべきものがないと、やっぱり、こうホント形だけになっちゃうかなあって思うので、「私はこれを伝えたい」とか、がないとダメかなあって。</p>
<p>自分自身や教育活動についての悩み</p>	<p>絶えず今のかかわりや授業実践がベストかなと考えながら、自分を見つめている。経験を積んでも問題が多様化して、解決の難しさを感じている。</p> <p>NO.7 やっぱり自分の、その思ったものと違う形でやっていくのに、適応し切れないって自分が、頭で考えては分かっているんですけども、そういうところはやっぱりきついなあって思いますけど。</p>
<p>男女差による悩み</p>	<p>女性教師は、男子が反抗的な態度を取ったりして、男子生徒の指導に悩むことがある。</p> <p>NO.8 男の子は、やっぱり男の先生と私ではちょっと態度が違うかなというときはありますね。</p>
<p>多忙のために余裕が無い</p>	<p>時間的な多忙さと仕事の緊張から心に余裕がなくなっている様子がうかがえる。</p> <p>NO.6 時間的にも厳しいですし、自分も忙しくなっちゃって、余裕がないような気がしますねえ。</p>

わりの安定に通じていることをうかがわせる。また、生徒を中心とした【生徒主体の接し方】を大切にするとともに、【子供同士の関係の自発的な援助】による相互作用を育てようとしている。これは、教師が生徒を丸抱えにするのではなく、【ネットワークの活用】や【職場の人間関係】【親との信頼関係を築くことの大切さの実感】といったマクロ的なかかわりの中で生徒を育てようとしている現われであると思う。

教師自身の悩みとしては、現状を良くしたいという気持ちから生じる【自分自身や教育活動についての悩み】や【多忙のために余裕が無い】ことによる生徒とのコミュニケーション不足があげられる。また女性教師の中には、反抗的な男子に対する指導の困難さなど【男女差による悩み】もあり、ストレスを多く抱えていることをうかがわせる。ただ、生徒の成長への【教師の願い】や生徒と心が通じたときの【意志疎通の喜び】が教育的情熱を支えていると思われる。

4 ま と め

本研究では、中学校教師を対象に、「生徒—教師関係」におけるコミュニケーション構造の分析を試みたが、面接調査の分析は十分とは言えない。今後、複数でデータを読むことにより、新たな視点が生まれると思う。分析の方法を検討して、さらに精査していく必要を感じている。ただ、面接調査を行って、教師が生徒とのコミュニケーションにおいて、深く悩んでいる実態に触れ、本研究を進めていく意義を感じることができた。

「子どもがわからない」「言葉が通じない」「仕事をやめたい」と訴えた50代で学年主任を勤めるベテラン教師の言葉には、重い響きがあった。インタビューにより実際に教育現場での生の声を聞く中で、教師は生徒とのコミュニケーション不全を感じつつも、生徒とのよりよい関係を目指して、かかわりを工夫して努力していることを知ることができた。

しかし、それらの一人ひとりの努力や実践は固有のもので、それがシステムとして機能するまでには至っていない。今後、固有の実践知や工夫を収集し、教師—生徒関係のかかわりに生かしていくことは、現代のコミュニケーション不全を解決していく方法を探る上でも重要なことであると考えられる。

-
- i 2006年12月16日 読売新聞掲載
 - ii 労働の科学57巻（2002年）樋口けい子「学校をやめたくなる教職員はなぜ多いのか」
 - iii モノグラフ・中学生の世界 VOL.68
 - iv 山口恒夫、後藤祐貴子、山口美和、教師の「心の病」と職場の人間関係、信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第1号（創刊号）2000. 7. 31
 - v 秦政春、教師のストレス——「教育ストレス」に関する調査研究福岡教育大学紀要（1991）（通号40）pp. p79～146
 - vi 山口正二、生徒と教師の心理的距離に関する実証的研究——最適な心理的距離・自己概念・学校適応からの検討カウンセリング研究 Vol.37, No.1（2004/2）pp. 8～14
山口正二、生徒と教師の心理的距離の変容に関する研究：現状と理想のズレの視点より教育相談研究 Vol.35（19970331）pp.33～42
 - vii 越智康詞、志波利香、教職の特性と教師の「心の病」に関する研究、信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』第1号（創刊号）2000. 7. 31
 - viii 木下康仁、グランデッド・セオリー・アプローチの実践、2003、弘文堂

Communication among “teachers and students” **—through interviews targeting teachers of junior high schools—**

Sanae Takahashi, Haruo Magari

In this research, we have examined communications of students and teachers of junior high schools. We interviewed teachers and made transcriptions.

This research was done from two viewpoints: 1, clarification of problems that teachers have 2, analysis of teachers’ worries. As for clarification of teachers’ problems, we used K. J. technique. For analysis of teachers’ worries, Grounded Theory Approach was used.

In communications among “teachers and students” in junior high schools, eight categories were chosen for examination. 1, fatigue and lost feeling 2, difficulty of understanding students 3, difficulty of having a good relationship with students 4, difficulty of guidance 5, problems of conversations with students 6, problems among students 7, suffering from relationship with other teachers 8, suffering from relationship with parents

Also, in the analysis that used Grounded Theory Approach, we created a model of communication structure. As a result, we found that relationship of teachers and students are influenced not only by their relationship but also by external factors such as grades, schools, and colleagues. In addition, communication of teachers and students significantly affects teachers’ passion toward work and lost feeling.